

MUC

京都外大国際文化資料館紀要 13号

文化遺産の創出と普及活動—人類学研究の新たな課題と挑戦—

ごあいさつ	南 博史……………	1
文化遺産を創造する「アートと考古学」	村野 正景……………	3
パブリックアーケオロジ—と二つの「差」	松田 陽……………	15
博物館でのレプリカの活用と意義 —国際文化資料館収蔵品展「レプリカ大集合—模型のちから—」展 開催報告—	西村由喜子……………	25
マンガが伝えるメキシコの歴史と文化 —情報発信ツール開拓への挑戦—	嘉幡 茂 マリア・フェルナンダ＝デ・ラ・セルバ・エルナンデス フリエタ・マルガリータ＝ロペス・フアレス……………	31
郷土史を伝える学習マンガ創出の試み —メキシコにおける学校知と日常知の節合をめぐる予備的考察—	小林 貴徳……………	41
トラジェコルティア (トピック1) 考古学って何? : 古代人の知恵 (トピック2) 探偵ミリアム : 盗掘者? 考古学者? (トピック3) ラ・ペドレーラの不思議 : 太陽と人と	嘉幡 茂、坪井 美和、窪田 有華……………	57
トラジェコルティア (トピック4) 春分の日にかこった出来事	小林 貴徳、坪井 美和、窪田 有華……………	93
おわりに—文化遺産の二面性—	嘉幡 茂……………	103
2016年度 年間活動報告		105
京都外大国際文化資料館紀要『MUC』総目次		107



京都外国語大学

国際文化資料館・博物館学芸員課程

2022

MUC

京都外大国際文化資料館紀要
第 13 号

例言

- 1 本誌は、京都外国語大学国際文化資料館および博物館学芸員課程の機関誌である。
- 2 本誌は、『MUC 京都外大国際文化資料館紀要』を正式名とする。
- 3 MUC は、国際文化資料館の欧語訳の頭文字を綴ったもののうち最も多かったものを採った。

英 語：University Museum of Cultures

スペイン語：Museo Universitario de Culturas

フランス語：Musée Universitaire de Cultures

ポルトガル語：Museu Universitário de Culturas

イタリア語：Museo Universitario di Culture

ドイツ語：Universitätsmuseum von Kulturen

- 4 執筆者の所属等については本文の末尾に記した。
- 5 本号の編集は国際文化資料館が担当した。
- 6 表紙に記したロゴタイプは、メキシコ古代文化の「動」を表すシンボルからイメージした。

京都外大国際文化資料館／博物館学芸員課程

2022

ごあいさつ

京都外国語大学国際文化資料館

館長

南 博 史

2016年6月4・5日京都外国語大学で開催した日本ラテンアメリカ学会第37回定期大会において、『文化遺産の創出と普及活動：人類学研究の新たな課題と挑戦』と題したパネルディスカッションを開いた。南博史、村野正景（京都府京都文化博物館学芸員）、嘉幡茂（現京都外国語大学国際言語平和研究所嘱託研究員）、小林貴徳（現専修大学国際コミュニケーション学部准教授）の4名が、考古学が今の社会や文化・経済にどのように関わっているのかをテーマに、それぞれの考古学のフィールドワークを通じた研究発表を行った。そして、松田陽（現東京大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文化経営学講座准教授）は、専門とするパブリック考古学の分野から、議論に加わりパネルの総括と今後の研究方向を提示した。

今回発行する京都外大国際文化資料館紀要13号は、おもにその成果をまとめたものであるが、諸般の事情によって出版が大幅に遅れてしまった。執筆いただいた方々に心よりお詫び申し上げます。

一方、発表6年近くが経過したが、こうした研究の原点としてのこのパネル成果の発表は意義がある。つまり、このパネルで明らかになった考古学が社会や経済と密接に結びついた新たな文化遺産の創出にどう寄与するか、さらに文化遺産の保護そして社会にどのように反映させるのかについての研究の重要性は、内外でますます高くなっているからである。

たとえば、南は発表「文化財ガバナンスの構築～ニカラグア共和国プロジェクト・マティグアスを通して～」のなかで、2013年から継続的に実施しているニカラグア共和国プロジェクト・マティグアスにおけるフィールドミュージアム活動¹を通して、住民主体となった持続的な文化財保護活動が重要であることを明らかにした。つまり文化財ガバナンスとは、こうした文化財を国や地方自治体だけが維持・管理するものではなく、地域住民が主体となって、さまざまなアクターとネットワークを構築し、地域の中で文化財を維持・管理し、地域に関わる諸問題の解決に向けて行う活動でなければならないとした。

これは、フィールドミュージアムによる持続可能な地域づくりにむすびつく。つまり、「社会環境の変化を予測して、フィールドミュージアムとしての地域がもつ資源を組み合わせ、環境やニーズに適応し、その地域を訪れる人々の満足を創出し、地域に暮らす人々の生活に資する」ためのマネジメントを展開することである。文化財ガバナンスの構築は、その中の一つのプロセスとして捉えていく必要がある。地域住民が、自ら地域の遺跡などさまざまな文化遺産について正しく理解していくことこそ地域の持続性につながる。

本紀要では、以下の4人の発表に関する論文と「マンガが伝えるメキシコの歴史と文化」トピック4つを掲載している。

村野正景：文化遺産を創造する「アートと考古学」

嘉幡茂、マリア・フェルナンダ＝デ・ラ・セルバ・エルナンデス、フリエタ・マルガリータ＝ロペス・フアレス：

マンガが伝えるメキシコの歴史と文化—情報発信ツール開拓への挑戦—

1 地域を博物館としてとらえ地域の課題解決にむけた博物館活動を行う。

小林貴徳：郷土史を伝える学習マンガ創出の試み—メキシコにおける学校知と日常知の節合をめぐる予備的考察—

松田 陽：パブリックアーケオロジ—と二つの「差」

嘉幡茂、小林貴徳、坪井美和、窪田有華：

トラジェコルティア（マンガが伝えるメキシコの歴史と文化）

このほか、「レプリカ」を新たな文化遺産として、積極的に展示に取り組む試みを行った国際文化資料館収蔵品展「レプリカ大集合—模型のちから—」の報告（西村由喜子）を掲載した。

最後に改めて、文化遺産に関わる内外研究者が多様な視点からその成果を持ち寄っていただけたことは、今後の新たな文化遺産の創出につながるものであることを明記して結びとする。

文化遺産を創造する「アートと考古学」

村野正景

はじめに—本稿の目的—

本稿では「アートと考古学 (Art & Archaeology)」という取組を紹介する。とりわけ、筆者が研究フィールドとする日本、そして中米のエルサルバドル共和国の事例を扱う。それに基づき、「アートと考古学」の取組の意義として「文化遺産の創造」があり、近年その行為が拡大していることを論じてみたい。

1. 「アートと考古学」の多様な取組とその分類

「アートと考古学」の取組は様々ある。試みに、その多様な目的・関心を平易な言葉で表現すれば、A. 過去の芸術を解明したい、B. 過去にはすばらしい芸術があることを現代的に示したい、C. 自分の芸術活動に活かしたい、といった分類が可能だろう (村野・岡村 2015; 村野 2016)。

A タイプは主に考古学者や美学・美術史家による美や芸術あるいはそれを創出した人々の“歴史”への関心を基にした取組である。過去の芸術作品がどのようなものであったか、その美がいかにして生まれ変化したかなどといった考証・検討を行い、その成果の表現は主に論文や講演会の形式となる。論文以外には、実物資料や復元品を用いた展示・紹介もおこなわれる。いずれも解説的な提示となるのが一般的な取組である (濱田 1940; 佐原 2005; 松木 2016 など)。

B タイプは主にアーティストやアート愛好家による、現代とは異なる美への関心を表した取組である。過去の芸術を、“歴史”という時系列的秩序の中に位置づけることには相対的に重きをおいていない点で、A とはやや異なる。むしろこのタイプは、過去の造形物に宿る芸術性を、過ぎ去った芸術としてではなく、現代でも芸術的力をもつものとしてとらえる、あるいは過去の造形物に現代的な価値や芸術性を発見し、現代芸術の中に持ち込み、現代 (的) に提示ないし利用しようとする。したがって、その取組は、考古遺物そのものの美術展示や審美的・愛好的利用が主体となる取組である (岡本 1952; 岡本 2016 など)。

C タイプは主にアーティストによる創作的関心を示している。すなわち、過去の造形物から見出される芸術性や技術を自らの芸術活動の資源として活用し、新たな創作に結びつけようという関心である。A や B が過去の造形物そのものを用いることとは異なり、アーティスト自らの作品創作に力点がおかれていることが特徴と言える。そのため、成果はアーティストの作品で表現される取組である (大野 1901; 猪風来 2011; 平川 2015 など)。

これらはいずれも長い歴史のある取組であり、それぞれ豊かな成果をあげてきた。またそれぞれが単独ではなく、複合的に取り入れられた取組もある (例えば、遺跡の復元画製作・展示やマンガ等を用いた歴史解説は A と C の複合的取組という場合があるし、歴史展示と美術展示を組み合わせた展覧会は A・B・C を融合させた取組となる場合がある)。これらの取組は、今後も発展を続ける重要な取組であろう。

ただし近年の動きでさらに興味深いのは、これらの関心や表現の仕方を直接・間接的に取り入れつつ、あるいは上記タイプと重複しつつも、少し違ったタイプの取組が生まれていることである (図 1)。

2. 近年の新たな「アートと考古学」の事例とその意義

近年、新たな先鋭的試みが始まっている。それは、アートと考古学がいっそう関係性を深めたり、扱う対象を拡大したりする中で生じてきており、既存の価値観や学問的営みを見直し、変化をもたらす、あるいは思考を切り開くような試みである（村野・岡村 2015; 安芸 2015; 松井・伊達 2016; 中村・松尾 2016; 佐藤 2016; 村野 2016）。言い換えれば、考古学者が研究成果として析出した過去のイメージを、アートの力を借りてわかりやすく紹介するような、またアーティストが自己表現の素材に考古資料を用いるような、そんなお互いをお互いに単なる補助役として利用するといった以上の、むしろそれぞれがそれぞれに介入し、現状に課題をつきつけたり、それまでの行為や認識を脱構築させたり、そんな取組である。

2.1 扱う対象の開拓

例えば京都での取組を例とすれば、従来の「アートと考古学」の取組で扱われていた考古遺物だけではなく、「遺跡の土」に価値を見出し、陶芸制作の素材として用いることで、「遺跡のアート」を創出した事例がある（木立 2015; 松井・伊達 2016; 松井 2016）。アートによって、遺跡や遺物ではなく、新たに土にも価値が付与されることになった。木立雅朗が指摘するように、遺跡の土は、それを利用できるような仕組みを構築することで、現在の陶芸界にも貢献しうる（木立 2015）。通常の発掘作業で排土として埋め戻されるか捨てられていたことに対する異議申し立てともいえよう。

また土だけではなく、発掘された遺跡自体がアートとして価値づけられた例もある。例えば陶芸家の松井利夫は、雨上がりに遺跡の発掘現場を訪問した際、検出された柱穴跡や溝跡を見て、こんな見立てをおこなった。「雨上がりの遺跡には丸いたくさんの水たまりが、まるで飲みかけの茶碗のような顔をして青空を写している」（松井 2017）。松井は遺跡の様子を、アーティストならではのユニークな視点で解釈したのである。この見立てを主観的として退けることは簡単だろう。しかしそれでは対話は続かない。むしろ、この見立てから何が生まれそうか、そこに考古学が気づくべきものはないか、などのように、退ける前に一旦立ち止まって検討しても遅くはあるまい。すでに、発掘された遺跡を、ランドアートないしアースアートと関連づけて評価する可能性は指摘されており（佐藤 2004）、遺跡のどんな状態がアートになりうるかという問いを立てることは、アーティストにも、考古学者にも意味あるものとなる。

松井の場合、このユニークな見立てと、そして同時に、通常の考古学調査ではこの土壌群が記録化の後に壊され埋め戻されるという事実とが、彼に芸術創作を促すことになった。「柱穴と呼ばれるその柱の穴跡からは、何か発掘されるわけではなく記号として図面に記録された後埋め戻される。何百年何千年という地中の闇から目覚まされ、再び永遠の闇に送り込まれるその前に、その穴の表面を粘土で型取り、掘り起こし、一晚野焼きしたものに漆を塗り重ね、陶漆茶碗に仕上げた」（松井 2017）。つまり、検出・記録後は壊され消失するような遺構（例えば柱穴）に関心を寄せ、それを型に利用して「遺跡の茶碗」を作り出したのである（図2）。このように、従来捨てられていたり壊されていたりしていたものに対して、それを資源として活用して見せ、価値づけるということが、ここでは起きている。

2.2 共働の仕方の開拓

なお松井の芸術創作は、発掘担当者の了承を得て、発掘作業とともに実施された。現状、どこでも実施可能というわけではなく、発掘担当者の差配や原因者らとの調整など様々な準備が必要だ。しかし遺跡の

発掘現場に、アーティストが加わることは、まったく不可能なことではないようだ。かつては日本考古学の父と呼ばれる濱田耕作と洋画家の太田喜二郎が、奈良の石舞台古墳や朝鮮半島の考古調査に同道し、調査風景や調査地に至る旅の様子を題材に学術記録兼アートを生んだ例がある（岸和田市教育委員会 1988；大塚 2016；村野 2017b；村野・植田 2019）。しかし、両者の協働の姿をほとんど目にすることはない近年の日本の考古学調査の現場では、一つの新たな展開と言えるだろう。調査の終わった遺跡にアーティストがやってくるのではなく、考古学者や地質、測量、生物などの専門家だけではなく、調査のはじめから芸術家が加わったチームにより、考古遺産の多様な価値が見出される、そんな可能性を秘めている。

2.3 歴史や過去へつながる新たな回路の創出

ところで、この松井の茶碗は、単に遺跡の土や遺構が資源として認められ、アートが生み出されたという点のみに意義があるのではない。松井が言うように、「茶碗の表面には当時の土が食い込み「記憶」としてぼくらの掌に送り届けられる」（松井 2017）。茶碗は、遺跡の「記憶」を、従来のような発掘報告書や論文とは異なる形で残したものとなり、またその製作の由来自体が茶碗を見たり触れたりする人々に対して、遺跡の「記憶」を喚起させる力を持つ。例えば、アート・ディレクターの松尾恵が企画した茶会型パフォーマンス「縄文茶会」で、この茶碗が用いられた。そして茶会で茶碗を手にした参加者からは、茶碗の素材となった遺跡や遺構についての多くの質問があった。それをきっかけに、参加者と考古学者とアーティストの間で、歴史や過去に関する対話が広がった。考古学者がつくる発掘報告書や論文の目的の一つに、過去の探求や遺跡の紹介・普及があるとすれば、この茶碗は報告書とはまた異なる回路で、一般の人々と過去や遺跡を結びつけ、過去や遺跡への興味を喚起する機能を果たした事例と言えるだろう。つまり、歴史や過去へつながる新たな回路を生み出したことに意義がある（図3）。

2.4 考古学が避ける領域へのアプローチ

さらにアートは、通常の科学や学術では踏み込むことを躊躇するような領域にまで踏み込める点も重要である。上述の茶会は、古代の人々のコミュニケーションがテーマとなっていて、パフォーマーなどによる演出も趣向が凝らされていた。その結果、茶碗やパフォーマンスが呼び水となって、上述のように遺跡や過去、そして古代のコミュニケーションという、考古学的には検証が難しく研究者が避けがちなテーマにまで参加者が想像を膨らませるに至ったのである。この事例はまた過去に関する自由な解釈の促進と同時に、語ってはいけないような「雰囲気」を軽減する。

この点に関して、京都文化博物館で実施した「アートと考古学」展（図4）への来館者のコメントは参考になる。「考古学というと歴史と地理（いつ、どこで）を知っていないと語ってはいけないような、アートというとわからないものも面白がらなければいけないような気になります。」このようなある種の「雰囲気」が、一般の人々にとって、考古学へのアクセスの壁となり、それが要因で過去や歴史への興味を遠ざけているならば、その壁を少しでも低くすることは、考古学がもっと試みるべきことだろう。これはパブリック考古学の役割の一つとも考える（村野 2015）。「アートと考古学がいっしょになると、誰かの手で作られたものに集中することができて楽しむことができました。」この展覧会のコメントにあるように「アートと考古学」への期待は高い。同時に、考古学的に検証が難しいような領域の解釈に、考古学者がどう向き合うのかというパブリック考古学的問いも立ちあがってくるだろう（松田・岡村 2012）。

2.5 人の行為への刺激

なおこの茶会では、茶碗とともに実物の縄文土器破片を見て触ることができるように、茶会の流れを設定していた。中でも茶会としての茶碗や破片の「拝見」で、筆者は茶碗や土器破片が参加者によって非常に丁寧に観察される姿を目にした（図5）。考古学者以外の一般の人々が、これほど細かに土器片を眺めることなど、発掘調査の現地説明会でも見たことがない。こうした念入りな「拝見」は、考古学者が実施する通常の出前講座やワークショップなどで期待していてもなかなか実現できないことであろう。それが、ここでは実現できている。従来のような形の教育普及の事業はもちろん重要で、その必要性はうたがう余地がない。しかし、それだけではなく、考古資料を見て触れる際、その場の雰囲気や設定を変える工夫には「人の行為」にも変化を促す効果があることをこの事例は示している。アートと考古学の共働には、その工夫のヒントが多く隠れている。

2.6 「アートと考古学」という新領域の構築

以上のような「アートと考古学」の取組は、これまで捨てられていたものに資源性を見出し、考古学者に価値への気づきを促している。また考古学以外の人々にとって、「発掘成果報告書」よりも考古学へのアクセスを容易なものとする窓口を作り出し、さらに従来のあり方では到達できなかった領域まで、一般の人々を誘える可能性を生んでいる。おそらく、まだまだ考古学という学問や、遺跡や遺物、あるいは考古学者の中に、様々な資源は隠れているのではなかろうか。考古学者にとって、遺跡に新たな価値があると気づくことは、自らの営みはその価値を減じさせていないかという自己点検を促すだろうし、従来の遺跡や考古資料の保存と活用のあり方を見直す契機にもなりうるだろう。

また同時に、アーティストにとっても、考古学の考え方や研究手法は刺激になるという。例えば、考古学の描く実測図は、日本画とも洋画とも異なるデッサンの一つとして、美術学校でも教える価値があるという。さらに、見えない過去をあの手この手でよみがえらせようと奮闘する「考古術」に、芸術の手法と近さを感じ、それを実際に自らの芸術に取り入れるアーティストもいる。その実例として伊達伸明の試みがある。それは「地域の誕生秘話」を創作し、「考古術」の力を借りながら、過去／現在を読み解きながら、地域づくりと連携しようというものであった¹。

こうした事例は実践レベルだけではなく、理論的に捉え直すことで、例えば「人間のみならず、事物などの非人間や非生命体もまた人間と等しく並ぶアクター（行為するもの）として捉えられ、人とモノとが織りなす社会関係をダイナミックに描き出そうと」とするアクターネットワーク理論などでの事例となり、「人文学の知」へ貢献する可能性すらあるだろう（佐藤 2014; 2016）。

このように近年の「アートと考古学」は、アーティストと考古学者の両者がともに響きあい、発展的に既存の枠組みとは異なる新領域を形成しているかのようである。そして上記の文化遺産保護の見直し、そして地域の「伝統創出」と地域づくりなどのように、「アートと考古学」は、考古学者とアーティストの二者間のみならず、一般の人々へもその影響を広げていく潜在力がある。今後はこうした取組のますますの増加とともに、例えば、現在の文化遺産保護制度や活用事業の中に新たな現実的仕組みが生み出されるといった実践的領域、そしてモノとヒトとの関与に関する理論への貢献といった理論的・学術的領域などで、より多彩で具体的な貢献をおこなうことが求められるのではなかろうか。

3. エルサルバドルの「アートと考古学」の事例

3.1 開発途上国での「アートと考古学」の役割

さて上記のような「アートと考古学」の取組を、日本とは異なるフィールドで実施することは可能だろうか。またそもそも取り組む意義はあるのだろうか。

筆者のもう一つの研究フィールドであるエルサルバドル共和国では、日本と同様の取組をするのは、実際、簡単ではない。考古学や考古遺産をとりまく社会環境や学術界の様子が大きく異なるからである。上記の日本の例は、誤解を恐れずに単純化して言えば、文化財保護制度が整い、考古学や遺跡の学術的価値が比較的一般に認識され、一方で逆にそれが考古学者以外の人々を相対的に遺跡から遠ざける、そんな側面も持つ日本だからこそ意味を持つ「アートと考古学」の取組の事例だろう。

それでは、いわゆる開発途上国において、近年の「アートと考古学」の動向から何を学べば良いのだろうか。それは、アートと考古学のコラボレーションによって、考古学や考古遺産の隠れた価値に気づくという位相だと筆者は考える。社会状況や文化財保護の仕組みが異なるエルサルバドルでも、考古学者とアーティストが共に価値に気づき、それをこれまでの行為の見直しと開拓につなげようとすることはできる。その取組の波及効果として、考古学者とアーティスト以外の人々にも、その価値を普及したり、現状の認識を批判的に検討させたり、課題解決に結びつけたりすることが重要だろう。

3.2 具体的事例

それでは、具体的にどのような課題解決に結びつくだろうか。例えば筆者が発掘調査を実施したエルサルバドルのチャルチュアパ遺跡群では、そのうち二つの地区が国立公園になっており、公園周囲に民芸品の店が並ぶ。しかしこの“一等地”で売られているものには、他国の遺跡の出土品を模倣した民芸品や他国から購入してきた品をかなり目にする（図6）。自国の、目の前の遺跡に取材した民芸品はまだまだ少ないのである。この要因には、自国のアート産業が育っていないこと、自国の考古遺産についての情報が少ないこと、そして自国の考古遺産の価値を他国と比べて相対的に低く見積もっていることなどが挙げられる（村野 2010;2015）。さらにこうした現状をもたらしている背景には、歴史的、社会経済的に作られてきた格差や貧困がある。したがって、ここでの課題は、考古遺産に対する一般の人々の現在の認識に「ゆらぎ」を与えて一定の変容を促し、しかし一方向的押し付けにならぬよう配慮しながら、より良い考古遺産の保護と活用、そして新たな民芸品の創作や社会生活の向上に結びつけることである。また、内戦終了間際に文化芸術審議会がかかげた「エルサルバドル人としてのアイデンティティの模索」という政策課題にも、自国の文化遺産の見直しは少なからず影響を与えるだろう。

こうした複数の課題解決に、「アートと考古学」は有効であり、取り組む意義があると考えられる。筆者は、2006年から「古代の土器の製陶技術復元と新たな民芸品・教材開発プロジェクト」を実施している。ここでは、新たな芸術や民芸品、または学校教材などを開発することを目指し、エルサルバドルにかつて存在し、古代メソアメリカに広く普及した「ウスルタン様式土器」の装飾技法を、アーティストなどの考古学者以外の人々を巻き込んで、復元していくことを行った（図7。村野 2014;2015）。この装飾技法は、考古学的にも未知の技法であった。そこで共同作業として様々な意見を一つ一つ試しながら、土器の復元実験を繰り返し行った（図8）。6年以上の時間がかかったが、今ではある程度、技法を復元できている（図7。村野 2017a;Sermeño et al. 2017）。これがどのような成果をもたらしたのかについて、「アートと考古学」

のプロジェクトの流れをかいつまんで紹介しておく。

このプロジェクトの背景は、まずは筆者が青年海外協力隊（考古学隊員）として派遣された際に、配属された文化芸術審議会（現・文化庁）文化遺産局考古課にて、事業申請し認められたことにある。長期滞在を特徴とする協力隊では、考古調査だけではなく、地域のニーズや現状の調査を地域の人々と密接なつながりの中で実施できた。またすでに、日本の大学の調査隊や先に派遣された協力隊員が発掘成果を上げており、チャルチュアペア市でも認知されていた。そこで現地の人々の中に、プロジェクトへ興味を持つものが現れた。さらに、筆者とほぼ同じ時期に同じく協力隊隊員としてエルサルバドル大学の美術科へ派遣された陶芸家が、考古資料に関心を示してくれた。それによって、エルサルバドル大学の美術科の学生たちと関係を構築できた。

首都からチャルチュアペアまでバスで約1時間半かけて、復元実験に参加するために学生らはやってきた。学生も陶芸家も、はじめウスルタン様式土器の存在を知らなかった。こうした認識に変化が生じ、それが大きくなって大学の教員などにも注目を集めるようになったのは、プロジェクトを開始してから2年近く経ってからである。きっかけは様々なようだが、謎の技法の一端が目に見えて解明できつつあったことが、一つの契機だ。同大学の美術科の教員から、「美術科学生の卒業論文の一つのテーマとして、ウスルタン様式土器の技術とその技術を応用した芸術創作を取り上げたいので、プロジェクトに協力してほしい」という要請をいただいた。またエルサルバドルの考古学会大会にあわせて、会場の博物館で、復元製作したウスルタン様式土器や彼らの作品の展示が実施された（図9）。この卒業論文のテーマ選びも、展示も、筆者が働きかけて実施されたわけではない。アート側が、現地の考古学者の協力をおおぎながら、自律的に実施したのである。このことは、これまで単なる考古学の研究素材だった一つの土器が、芸術資源としても気づかれ、その認識が広がったことを示している。いまだプロジェクトは道半ばではあるものの、自国の考古遺産の価値の一端にアーティストが気づいたと言えるだろう。

3.3 「参加型考古学」と「実験考古学」の有効性

このように、このプロジェクトを隠れた価値の発見ということである程度評価できるとするならば、その成功の鍵は、選んだテーマが潜在的ニーズと合うものだったということ、また実験考古学という手法が考古学者以外の興味・関心を引くものであったこと、そして何よりプロジェクトの初めから「参加型」であったことと考える。実験考古学という手法は、考古学的研究手法でありながら、一面で芸術創作ともつながる（図10）。「アートと考古学」の手法として、他にも応用可能であり、今後も鍛えるべき手法と考える。そして「参加型」であることにより、活動の初めからお互いが学ぶことができ、その中でアート側に気づき生まれ、また考古学側にも別の気づき生まれたことは重要である。アート側による芸術資源としての土器への気づきは上述のとおりだが、その点に関して、例えば、復元実験の中で、オリジナルの考古資料と比較したときにオリジナルとは異なる結果となったため、復元実験としては失敗作だったものについて、アート側からは「これは美しい」「オリジナルの文様とどちらがより芸術的価値があるだろうか」という発言があった。考古学者の視点で失敗と判断することは簡単だったけれども、アーティストの視点では興味を引く文様であり、アーティストの視点がなければ、一つの価値を見逃していたことになる。このわずかな例を見ても、考古学者だけでは気づかない価値があることがわかる。

以上のような事例によって、「アートと考古学」に取り組む意義の一端は示されたであろう（より詳しくは、村野 2015 参照）。なお、この展示会では、来館者の中に、展示作品を購入したいという者が現れた。

実際に作品を売ることができたことは、アーティストのさらなるモチベーションにつながった。そしてまたこのことは、このプロジェクトの目的の一つである、新たな民芸品ないし観光資源の創作という目標を達成しうることを示している。

4. 「文化遺産の創造」の一環としての「アートと考古学」

さて、以上の事例は、数ある「アートと考古学」の取組をごくかいつまんだものに過ぎない。しかし「隠れた価値に気づく」という共通した特徴は見出せよう。

本稿執筆を依頼されたきっかけは、日本ラテンアメリカ学会のパネルであり、そのテーマは「文化遺産の創出」であった。この言葉には、二つの意味があると思う。一つは、文字通り後の世にも伝わるようなモノやコトを新たに生み出すことである。そして、もう一つの側面として、これまで存在しながら看過されていたモノやコトに気づき価値づけるという意味である（西山 2015; 村野 2015）。

世界中で文化財保護の危機や文化遺産の消失が問題視される中で、逆に増えている文化遺産がある。それは世界遺産である。単に世界遺産として登録される数が増えているということではない。また世界遺産とすべき、文化や芸術が新たに製作されたというわけでもない。世界遺産として認識する枠組みが増えているのである（西山 2015）。これまで気づかれていなかった価値を認識する枠組みが見つければ、それによって保護すべき遺産も増えてゆく。それは、新たな遺産を創作することに等しい意味があることを、世界遺産の事例は示している。この視点は、考古遺産にも応用できるだろう。

とはいえ、この新たな枠組みや視点を得るのは、そう簡単ではない。従来の視点を転換させることは、一人では容易ではない。それでは鍵は何だろうか。それは「参加型」であることと考える。例えば、地中に埋もれていた土器片や石器片が発見されたとして、それが考古学者によって歴史を解明する重要な証拠となれば、歴史資源として価値を持つものとして扱われるだろう。それは一つの気づきによる価値づけである。ただし、それだけでは、学者間で通用するだけの価値かもしれない。もっと多様な光が当てられることで、考古学者だけでは気づかないような、様々なそして豊かな価値づけができるかもしれない。それは、すでに事例で示したようにアーティストが参加することによって十分実現可能である。ここに「アートと考古学」の意義があり、この意味で、「アートと考古学」は「遺産創造」あるいは「価値創造」を体现するものと言えよう。とりわけ近年は創造行為の対象や内容が拡大しているのである。

まとめと今後の課題

そこで最後に、このような「アートと考古学」の新たな動きを、はじめに述べた分類と同様に、その取組を改めて平易な言葉で表現しておこう。それは、次のようになるだろうか。「D. これまでの考古学、アート、それぞれの営みを見直し、また新たな行動を生み出したい。」Dタイプの特徴は考古学者やアーティストなどの積極的且つ批判的態度を持った共働にある。このタイプの取組は、過去の造形物のみならず、それを取り扱う考古学者の発掘・実測などの作業や学問特有の思考方法といった考古学の営み全体に及んでいる。すなわち考古学の多様な芸術性をより良く提示しようというのだが、それに伴い考古学にもっと開放を求めたり、看過されている物事を批判的に取り上げたりするため、考古学の営みの見直しに至る。同時に、それはアート側にも刺激を与え、これまでのアートの見直しにも波及する。これらを受けて、両

者は互いに新たな思考を切り開き、新たな行為に結びつけようとする。成果はこうして行為そのもので表現される。その行為は、現状変革や脱構築の可能性を帯びるため、新たな文化遺産の創出や保護の論理の整備にもつながり、一般の人々も巻き込むこととなる。

とは言え、エルサルバドルだけではなく、日本においても同様だが、上記の事例のいずれもが、未だに単発的で点的な活動にとどまっている。これを持続的且つ面的な活動にすることはできるだろうか。おそらく、意義は認められるけれども、実現は難しいというのが現状の一般的な答えだろう。これをどのように乗り越えていくのか。この課題解決を試みるのが、現代社会や人文学の知へ真に貢献することになるのではないか。

注

- 1 具体例は、神戸アートビレッジセンターで開催の Exhibition as Media 2016-2017「とりのゆめ / bird's eye」(2017年2月18日～3月5日)。

参考文献

- 安芸早穂子 (2015) 「アートな考古学の風景② 復元イメージの揺らぎとリアリティ」『考古学研究』62-3、pp.28-32.
- 猪風来 (2011) 『土夢華—猪風来の新縄文芸術論考—』猪風来美術館.
- 大塚和義 (2017) 「石舞台古墳発掘見学絵巻」『古代文化』68-3、pp. 120-122.
- 大野雲外 (1901) 『模様くら』高山房.
- 岡本太郎 (1952) 「四次元との対話 縄文土器論」『みづゑ』558、pp. 3-18.
- 岡本康明 (2016) 『縄文と現代』京都造形芸術大学芸術館.
- 岸和田市教育委員会 (1988) 『濱田青陵 その人となり』岸和田市・岸和田市教育委員会.
- 木立雅朗 (2015) 「京都の土と窯」『国際シンポジウム・シリーズ「伝える力3」京都の土と石 - 伝統工芸を支える資源』発表資料、2105年3月8日、立命館大学.
- 佐藤啓介 (2004) 「作品としての発掘現場—アースワークから考える」www.k5.dion.ne.jp/~res/ (2017-1-20).
- 佐藤啓介 (2014) 「考古学は科学か哲学か」『考古学研究会 60周年記念誌 考古学研究の60の論点』、pp. 157-158、考古学研究会.
- 佐藤啓介 (2016) 「アートな考古学の風景⑤ アートと考古学の協働を複雑化する」『考古学研究』63-2、pp. 33-37.
- 佐原真 (2005) 『美術の考古学』(金関恕・春成秀爾編)、岩波書店.
- 鈴木希帆 (2011) 「近代日本における縄文土器観 - 大野雲外による図案化を中心に」『美術史』171、pp. 120-136.
- 中村大・松尾恵 (2016) 「アートな考古学の風景④ 共に語らい、共に愉しみ、共に拓く」『考古学研究』63-1、pp. 17-21.
- 西山徳明 (2015) 「歴史文化まちづくりへのチャレンジ～遺産創造とエコミュージアム」『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せなかたち』、pp. 43-5、京都文化博物館地域共働事業実行委員会.
- 濱田耕作 (1940) 『日本美術史研究』座右宝刊行会.
- 平川忠 (2015) 『土窯プロジェクト』www.tsuchigama.com (2017-1-20).
- 松井利夫 (2016) 「野良碗」『アートと考古学展 図録』、pp. 60-61、京都文化博物館.
- 松井利夫 (2017) 「陶漆茶碗」『第29回京都美術文化賞受賞記念展 解説キャプション』.
- 松井利夫・伊達伸明 (2016) 「アートな考古学の風景③ アートが土足で踏み込んだ!」『考古学研究』62-4、pp. 11-15.
- 松木武彦 (2016) 『美の考古学—古代人は何に魅せられてきたか—』、新潮社.
- 松田陽・岡村勝行 (2012) 『入門パブリック・アーケオロジー』、同成社.
- 村野正景 (2010) 「エルサルバドル共和国における遺跡保護に関する一考察—文化遺産国際協力の向上のために—」『遺跡学研究』7号、pp. 221-232.
- 村野正景 (2014) 「先スペイン時代の「ものづくり」に挑戦する—いわゆるウズルタン様式土器の復元と現代的再生プロジェクト—」『チャスキ』49、pp. 6-9.
- 村野正景 (2015) 「文化遺産の継承そして創造へ—参加型考古学を試みる」『過去を伝える、今を遺す—歴史資料、文

化遺産、情報資源は誰のものか』 pp. 84-114、山川出版社。
 村野正景 (2016) 「「アートと考古学」とは何か」『アートと考古学展 図録』、pp. 5-9、京都文化博物館。
 村野正景 (2017a) 「謎の装飾技法を解く：いわゆるウスルタン様式土器の復元と現代的再生プロジェクト」『金沢大学文化資源学研究』 16、pp. 87-137 金沢大学国際文化資源学研究センター。
 村野正景 (2017b) 「朝鮮絵巻」『古代文化』 69-3、pp.413-420。
 村野正景・岡村勝行 (2015) 「アートな考古学の風景①「アートと考古学」ってなに?」『考古学研究』 62-2、pp. 12-16。
 村野正景・植田彩芳子 (2019) 「近代京都の「アートと考古学」の一検討」『朱雀』 31、pp. 53-68。
 Sermeño,H.A., M.Murano and G.R.Garcia (2017) “Una Práctica de Arqueología Pública en El Salvador resurgimiento de técnica antigua para elaborar cerámica negativa Usulután, desarrollo de una nueva artesanía y material educativo”, Estudio de arqueología: México y Centroamérica, Secretaría de Cultura de la Presidencia, El Salvador.

(むらの まさかげ 京都府京都文化博物館学芸員)

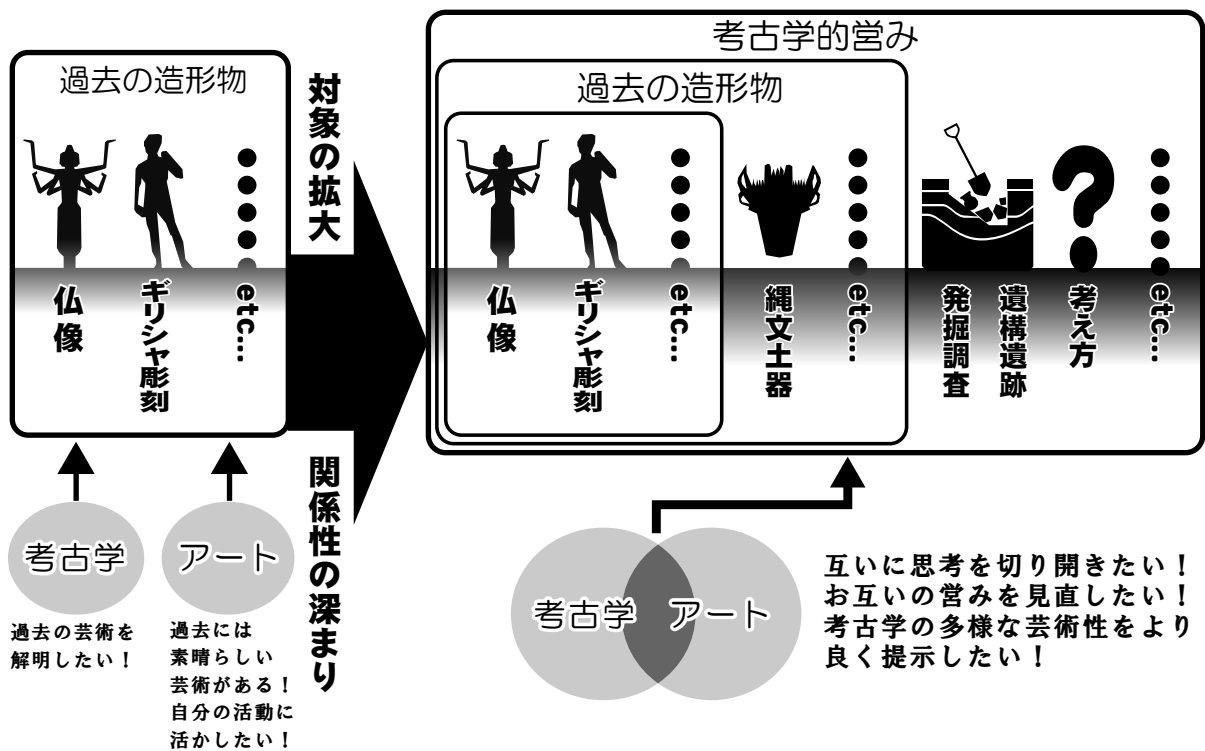


図1 アートと考古学の関係の変遷 (村野・岡村 2015 より引用)



図2 遺跡のアート創作
 (左：同志社女子大学構内遺跡での芸術創作、右：遺跡の茶碗 (撮影：Stefano Spinelli))

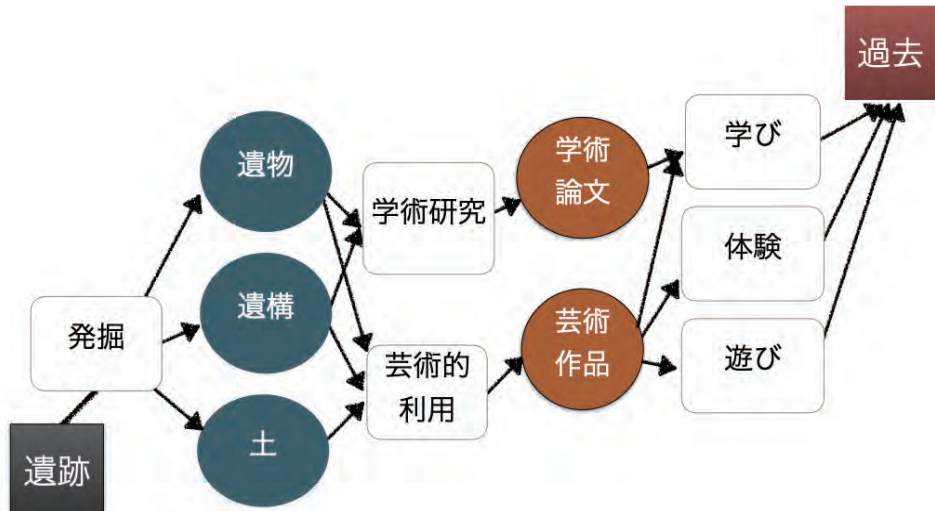


図3 過去への意識を喚起する回路
芸術利用が介在することで回路を多様化できる



図4 「アートと考古学」展 展示機会の無かった破片資料が芸術資源になった
(左：コンテナと土器片の展示風景 (撮影：表恒匡)、右：「突起夜行」(撮影：日下部一司))



図5 縄文茶会にて茶器と土器片の「拝見」
(撮影：森川諒一)



図6 チャルチュアバ遺跡群タスマル地区前の民芸品店と商品
(隣国のグアテマラに買付に行く、ないし隣国から持込まれたものを多数店に置いている)



図7 「ウルスタン様式土器」のオリジナル(左)と復元品(右)
(オリジナルは、チャルチュアバ遺跡群カサブランカ地区バイパスの遺構 F.T.-5 出土。復元品は Sermeño et al. 2017 を参照。)



図8 実験考古学の様子
(左：半地下式窯で土器の焼成実験中、右：焼成実験後の土器を観察)



図9 学会にあわせた展示の様子
(V Congreso Centroamericano de Arqueología en El Salvador。2015年。)



図10 アート作品（撮影：Henry A. Sermeño）
（左：Ik（El Señor del viento。風の王））右：Identidad Fragmentada（断片化したアイデンティティ）

※本稿は2017年1月に提出した。本年2022年に刊行されるにあたり、修正・追記すべき点はあるが、変更はごく一部にとどめ、提出時の考えを示すことにした。現地点での考えや成果はまた別の機会に発表を試みたい。最後になりましたが、本稿刊行の機会を作ってくださった国際文化資料館の皆さまに感謝申し上げます。

MUC
Journal of University Museum of Cultures
No. 13

Creation of Cultural Heritage and Promotional Activities
—New Challenges for Anthropological Research—

Greeting	Hiroshi MINAMI.....	1
“Art and Archaeology” as an initiative to create cultural heritage	Masakage MURANO.....	3
Two divides in public archaeology	Akira MATSUDA.....	15
Replicas in Museum of International Cultures	Yukiko NISHIMURA.....	25
Learning Mexican Prehistory and Culture through Manga A Tool for Disseminating Information to the Public	Shigeru KABATA María Fernanda DE LA SELVA HERNÁNDEZ Julieta Margarita LÓPEZ JUÁREZ.....	31
An attempt to create an educational comic book about local history: A tentative study of the union of scholar and popular knowledge in Mexico	Takanori KOBAYASHI.....	41
Tlayecoltia (Topic 1) What is Archaeology?: Wisdom of the Ancients (Topic 2) Detective Miriam: A Grave Robber or Archaeologist? (Topic 3) A Mystery of La Pedrera: The Sun and People	Shigeru KABATA, Miwa TSUBOI, Yuka KUBOTA.....	57
Tlayecoltia (Topic 4) Something strange happened on Vernal Equinox Day	Takanori KOBAYASHI, Miwa TSUBOI, Yuka KUBOTA.....	93
Postscript-the Front and Back of Cultural Heritage	Shigeru KABATA.....	103
Annual activity report 2016		105
Journal “MUC” complete table of contents		107

